

《開幕》森美術館

「六本木クロッシング2019展:つないでみる」同時開催プログラムのご案内

会期：2019年2月9日(土)―5月26日(日) 会場：森美術館(六本木ヒルズ 森タワー53階)



MAMコレクションは、森美術館の収蔵品を、多様なテーマに沿って順次紹介する展覧会シリーズです。

MAMコレクション009:米谷 健+ジュリア

主催：森美術館

企画：近藤健一(森美術館キュレーター)

本展では、日本人とオーストラリア人のユニット、米谷健+ジュリアによる、ウランガラスとブラックライトを用い、緑色に光るアリの形を模した立体作品《生きものの記録》(2012年)を紹介します。

オーストラリア北部、アーネム・ランドには、その大地を掘り起こすと地中から巨大な緑色のアリが出現して世界を踏み潰し破壊するという、先住民アボリジニに伝わる神話「緑アリの教え」があります。しかしながら、1970年代、彼らの反対を押し切りウラン鉱山開発が行われた歴史が存在します。未来への警鐘とも解釈できるこの神話や鉱山開発の経緯の調査を経て制作され、原水爆の恐怖に怯える男性を描いた黒澤明の映画「生きものの記録」(1955年)からタイトルを引用した本作は、ウランを燃料とした原子力発電や核兵器など、核に対する作家の問題提起であるといえるでしょう。

米谷 健+ジュリア

米谷健、1971年東京生まれ。米谷ジュリア、1972年東京生まれ。2009年に米谷健がオーストラリア代表の一人として参加した第53回ヴェネチア・ビエンナーレを機会にユニット活動を開始。近年の主な展覧会に、シンガポール・ビエンナーレ 2013、「最後の誘惑：米谷 健+ジュリアのアート」オーストラリア国立美術館(キャンベラ、2015年)、茨城県北芸術祭(2016年)などがある。

《生きものの記録》 2012年
ウランガラス、ワイヤー、ブラックライト 3×3×5.2 m
寄贈：ジーン&ブライアン・シャーマン
展示風景：「生きものの記録：米谷 健+ジュリア」
4Aアジア現代美術センター(シドニー)、2012年
撮影：Zan Wimberley



?! 関連プログラム

■ アーティストトーク「自作を語る」 ※日英同時通訳付

アーティスト自身が、これまでの制作活動と出展作品について語ります。

出演：米谷 健+ジュリア モデレーター：近藤健一(森美術館キュレーター)

日時：2019年2月10日(日) 17:00-18:30(受付開始：16:30) 会場：森美術館オーデトリウム 定員：80名(要予約)

料金：無料(ただし、当日有効の「六本木クロッシング2019展」チケットが必要です)

詳細・お申し込み：森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内)：津原、田ヶ谷、伊藤
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル

MAM
SCREEN

MAMスクリーンは、世界の多様な映像作品のなかから選りすぐりの
シングル・チャンネル作品を上映するプログラムです。

MAMスクリーン010: ミハイル・カリキス

主催：森美術館

企画：片岡真実（森美術館副館長兼チーフ・キュレーター）

ミハイル・カリキスは、音楽、建築を学んだ後、映像、写真、パフォーマンスなど多様なジャンルを横断し、体感型インスタレーションへと発展させてきました。彼は音を作品の主要な素材として捉えており、なかでも人間の声は重要な役割を果たしています。

本プログラムでは、《地底からの音》《怖くなんかない》《チョーク工場》の3作品を上映します。元炭鉱労働者による合唱団が、当時聞いていた爆発音や機械音などを声に転換して歌う《地底からの音》。過疎化した村で生きるティーンエイジャーの思いからラブを作曲し、ミュージックビデオ風に仕上げた《怖くなんかない》。1950年代末から積極的に障がい者を雇用してきた工場のサウンドスケープ（音による風景）が描かれた《チョーク工場》。いずれも、人間の存在そのもの、友情、労働、^{アクション}行動などに対するオルタナティブなモデルを提示し、経済や産業構造の変化が個々の人生に及ぼす影響、労働や雇用とは何か、コミュニティとは何か、といった根源的な問題を考えさせます。

ミハイル・カリキス

1975年テッサロニキ（ギリシャ）生まれ、ロンドン在住。第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2011年）、マニフェスタ9（ベルギー、2012年）、あいちトリエンナーレ2013、第19回シドニー・ビエンナーレ（2014年）など世界各地の国際展や美術館で作品を発表。2019年2月8日から24日まで第11回恵比寿映像祭にも参加する。



《地底からの音》 2011-2012年 ビデオ



《怖くなんかない》 2016年 ビデオ



《チョーク工場》 2017年 ビデオ

上映作品 ※ 上映スケジュールについては、森美術館ウェブサイトをご覧ください。 www.mori.art.museum

《地底からの音》	2011-2012年	ビデオ	6分47秒
《怖くなんかない》	2016年	ビデオ	10分
《チョーク工場》	2017/2019年	ビデオ（シングル・チャンネル・エディション）	22分22秒

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：津原、田ヶ谷、伊藤
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル



MAMプロジェクトは森美術館が世界各地のアーティストと
実験的なプロジェクトを行うシリーズです。

MAMプロジェクト026:カーティス・タム

主催: 森美術館 **企画:** 近藤健一(森美術館キュレーター)

制作協力: ADAM Audio、アーカスプロジェクト実行委員会、
ロサンゼルス・カウンティ美術館アート&テクノロジー・ラボ

即興演奏音楽史に影響を受けリサーチを行うカーティス・タムは、西洋的な知識体系に疑念を抱き、人間の定義について遊び心に満ちた命題を提示しています。近作では人間とそれ以外のものの自然災害に対する反応について研究しており、2017年、2018年と日本に滞在し、地震学者から地震波の性質を学んだほか、動物の地震予知能力を研究する科学者を取材しました。そのなかで^{なま}鯨に地震予知能力があるとされていることを知った作家は、江戸時代の風刺木版画、鯨絵を研究。一方で膨大な音源の収集も行い、サウンド・ライブラリーと称したこの音源集に、シャーマンの詠唱やセミの鳴き声、重さ数トンもの寺院の梵鐘の音などを加えました。また、作家自ら梵鐘の中にたたずみ、子宮のような空洞のなかで自身の体に音波がどのように作用するのかを体感しながら、共鳴する音波を録音するという実験的な試みも行っています。

本展の核となるサウンド・インスタレーションでは、梵鐘の胎内に見立てた空間へと鑑賞者を誘い、体の内部で深く音を聞く「ディープ・リスニング」という状態を体験させます。通常は雑音によりかき消されている音域の音を聞くことにより、鋭敏な感覚を持つ鯨になったかのような体験をし、私たちの感覚は刷新されることでしょう。



カーティス・タム

1987年カリフォルニア州生まれ。2015年、サントゼウム(ギリシャ、サントリーニ島)にて滞在制作を行い、島の新しいサイレン音を提案するプロジェクトを実施。2017年ロサンゼルス・カウンティ美術館アート&テクノロジー・ラボ・アワード受賞。「アーカスプロジェクト2017 いばらき アーティスト・イン・レジデンスプログラム」(茨城県守谷市)参加。

《細胞調律センター》2017年
サウンド・パフォーマンス
展示風景:「アーカスプロジェクト2017 いばらき アーティスト・イン・レジデンスプログラム」
アーカススタジオ(茨城)
撮影:加藤 甫 画像提供:アーカスプロジェクト実行委員会 *参考図版

?! 関連プログラム

■ レクチャーパフォーマンス「鐘は、『鐘』ではない」 ※日英同時通訳付

なぜ聞く(ヒアリング)と聴く(リスニング)を区別しなくてはいけないのかをテーマに、作家が日本での体験に基づき、世界各地で収録した音源集であるサウンド・ライブラリーの音を使ったレクチャーパフォーマンスを行います。パフォーマンス後には、展覧会を企画したキュレーターとのディスカッションを実施します。

出演: カーティス・タム ほか **聞き手:** 近藤健一(森美術館キュレーター)

日時: 2019年2月10日(日) 14:00-15:30(開場:13:30) **会場:** 森美術館オーデトリウム

定員: 60名(当日先着順) **料金:** 無料(ただし、当日有効の「六本木クロッシング2019展」チケットが必要です)

詳細: 森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum **お申し込み:** 不要

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原、田ヶ谷、伊藤
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル